A. S. ニールの女性解放思想とサマーヒル・スクールにおける 女子教育的側面

持田 洸

(富山大学)

1. はじめに

本稿の目的は、教育思想家・実践家であり、イギリス新教育運動¹⁾の代表的人物であるA. S. ニール (Alexander Sutherland Neill 1883-1973) の女性解放思想の内実を明らかにするとともに、彼が創設したサマーヒル・スクール (Summerhill School 1921-, 以下、「サマーヒル」) における女子教育的側面を明らかにすることである。彼がイギリス新教育運動における代表的人物として教育思想史上に位置付けられているのは、その運動期において権威や抑圧から子どもを解放することを提唱し、サマーヒルを創設して急進的な教育実践を実現させたことにある。そのようなニール教育思想を体現する実践の場としてのサマーヒルは「世界でいちばん自由な学校」²⁾とも評され、またサマーヒルをモデルにした学校が各地で創設されたことから、彼の思想や実践が多くの教育家に影響を与えたことが示唆される³⁾。本稿はそのニールの思想について、「女子・女性」といった側面から研究する試みである。

本稿において「女子・女性」といった側面からニール研究に着手する意義としては、彼の教育思想における主要なテーマとして掲げられている「権威や抑圧からの解放」について、それが「(既存社会下における被抑圧者としての) 女性」をも射程に入れていたこと、そして女性を解放する手段としての教育という意味において、女子教育的側面もサマーヒルに付されていた、といった思想研究としての新たな見地を見出すことができることにある。彼が女性の解放を希求していたことについては、彼の様々な著作の中から垣間見ることができる。それにも関わらず、先行研究には彼の思想を「女性解放思想」の側面から明らかにしたものはなく、また女性解放思想史の中にニールを位置付けたものも管見の限り確認できない。またサマーヒルは、ニール教育思想に基づいた「教育改革」のための実験学校としての性質を有していたが、先行研究では彼が教育改革による社会改革を図っていたことが明らかにされており、彼の女性解放思想が、女性を抑圧している既存社会に対して批判的見地に立ち、その既存社会を改革することによって女性が解放されると考えたものであること、またその実現をも目指して教育改革に着手したことに着目すれば、教育思想と女性解放思想との結びつきを見出すことができる。それはまたサマーヒルが女子教育的側面をも有していたことも示唆されるが、女子教育史の中のニールの位置付けは、男女共学は好ましくないという一般的傾向があった中で共学校を創設した「進歩主義を標榜する学校」のうちのひとつ、といった紹介程度であり (滝内 1994, p.373)、その実践や思想の具体については一切

とってよいほど触れられていないのが現状である。以上から、本稿においてニールの女性解放思想およびサマーヒルの女子教育的側面を明らかにすることは、女性解放思想史および女子教育史においてニールを位置付けることのできる可能性を見出すことができるという点においても意義があるといえよう。

本稿の流れは次の通りである。まずニール研究においてジェンダーの視点からアプローチしている先行研究をまとめ、その現状を整理する。次に、彼の生きた時代における英国の女性解放に関する社会状況を概観した上で、彼の著書の中から、女子・女性が特有に受ける抑圧とその影響、およびそれからの解放の必要性について論じている箇所を抽出し、整理することで、彼の女性解放思想の要点と思想的特徴を明らかにする。次に、ニールの社会改革思想とそこにおける教育改革の位置について、具体的には教育改革が社会改革の手段として位置付けられていたことについて論じ、社会改革思想と女性解放思想の交差について明らかにする。その上で、教育による社会改革と、それによる女性の解放、といった段階論があることを見出すことで、サマーヒルにおける女子教育的側面を明らかにする。

2. 先行研究の検討

ニールの女性解放思想や、サマーヒルにおける女子教育的側面について論じている先行研究は確認できないものの、彼の思想や実践をジェンダーの視点から評価しているものについては確認することができる。例えばストナック (Stonach) とパイパー (Piper) は、「サマーヒルは、生徒のアイデンティティの育成と、年齢、性別、民族、国籍の異なる生徒間の民主的で友好的な関係の構築に関連する民主的实践を体現している」(Stonach / Piper 2008, p.31) と述べ、異性間においても民主的で友好的な関係を構築している実践としてサマーヒルを評価している。サマーヒルがニールの思想を実践に移した場であることから、彼が教育において民主的で友好的な異性関係を築くことを望んでいたことがここから推察される。またプリュドム (Prud'homme) とレイス (Reis) は、ニールの教育原理をルソーのそれと結びつける言説が数多くあることを指摘し、そのような言説がニールの教育的貢献を正当に評価しているとは言えないことを論じている。ここでは、その反証材料の一つとして両者のジェンダー観に着目しており、ニールについては、年少少女の教育的ニーズに非常によく似た形で配慮していたことから、男女を対等な存在と見なしていたことが推測できることに対し、ルソーについては、教育者は男子が自分らしくいられるように教えるべきであり、女子は後に男子を喜ばせることができるように教育すべきであると主張していたことから、両者のジェンダー観が大きく矛盾していること、そしてそのことから、両者の教育学的信条を比較することは不適切であると述べている (Prud'homme / Reis 2011, p.16)。

しかしながら、これらの先行研究は、あくまでニールの思想からではなくサマーヒルにおける実践から評価しており、思想研究としては着手されていないことが伺える。本稿において彼の女性解放思想を明らかにすること、およびそれと教育実践との結びつきを示すことは、女性解放運動が展開され、女性の権利が徐々に獲得・拡張されつつあった時代においてサマーヒルの理念として示された、教育における男女の平等と民主的関係性の構築について、彼の思想的背景から辿ることとも結びつき、これらの先行研究に対する思想的根拠の提示に繋がるものであると言える。

3. ニールの生きた時代における英国の女性解放に関する社会状況

では、ニールの生きた時代における英国の女性の社会状況はどのようなものであったのだろうか。先で少しほど述べた通り、彼の生きた19世紀末ごろから20世紀後半にかけては、先進国において女性の解放と権利の獲得が急速に進行した時代であったと言える。19世紀末から20世紀初頭にかけて生じた第一波フェミニズムは、参政権や財産権、相続権などの公的な権利保障や、女性に対する高等教育への門戸の解放に繋がった。また1960年代以降に勃興した第二波フェミニズムでは、第一波で獲得した権利の拡張に加え、固定的なジェンダー観をつくり出す社会的抑圧や経済的格差の是正、性に関する自己決定権などが主張され、その実現に向かわれた。

このような流れは英国においても同様であった。1866年にJ.S.ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)が婦人参政権を求めて請願書を議会に提出したことをきっかけに婦人参政権運動が発生し、一時退潮したものの、第一次世界大戦後の1918年に、30歳以上の女性世帯主と世帯主の妻、年間5ポンドの資産所有者、大学卒業者に選挙権が賦与されることとなり、10年後の1928年には、その対象は21歳以上の男女に拡大された。また、2つの世界大戦は結果的に女性の社会進出の後押しとなった。第一次世界大戦により男性が戦場に駆り出されたことによって公共労働を女性が担うようになり、戦後一時的に家庭に回帰することとなるも、その後の第二次世界大戦において再び女性の労働力が動員されることとなる。特に第一次大戦中のそれにおいては、戦時中の女性の貢献が認められたことが1918年の選挙権賦与につながった。19世紀における女性の立場が「夫に扶養されるもの」であったことを踏まえると、この女性の労働市場への参入は女性の立場を大きく変えることに繋がった。

教育においては、1870年代以降さまざまな形態の女子校が設立され、ミドルクラスの女子が男子と同じような学校教育を受けることが可能になった。グラマー・スクールやパブリック・スクールといった進学校は男子に限定されていたことから、これらの女子校は大学進学を目指す女子進学校として発展していくこととなり、後に中等教育機関として位置付けられることとなる。1902年教育法によって女子校を含む中等教育の整備が本格的に進んでいくことになるが、その大衆化につれて男女差に応じたカリキュラムや男女別学が強く求められ、傾向としても共学は好ましくないというのが一般的であった。それゆえに、男女共学の寄宿学校であるサマーヒルは異彩を放っていたと言えるだろう。サマーヒルが英国に移転したのは1924年のことであるが、無論その時代においてもそのような価値観が一般的であったため、そのような側面からもサマーヒルは画期的な試みであった。

4. ニールの女性解放思想の要点とその思想的特徴

以上のように、ニールの生きた時代は女性の解放と権利の獲得が進んだ時代であったと言えるが、そのような時代の中で、ニールは女性の解放についてどのような思想を有していたのだろうか。本章では、彼の著書の中から、女子・女性が特有に受ける抑圧とその影響、およびそのような抑圧からの解放について論じている箇所を抽出し、整理することで、彼の女性解放思想の要点

を明らかにする。その要点を先取りすると、①性別による経済的不平等、②女性の職業選択の制限、といった2点があり、これらが女性を抑圧し、心理的影響を与えていることが論じられていた。そして、女性に不利益を被るこのような社会状況は、家父長制社会における男性中心、男性支配の構造にあることを彼は指摘している。以下、この2点について詳述し、その特徴とフェミニズム思想史上の位置について考察する。

(1) 性別による経済的不平等

ニールは、既存社会において男女が経済的に不平等であり、そのことが女性に心理的影響を与えていることを主張している。例えば、男女における恋愛の様相の違いについて、男性は複数の女性に対して性的魅力を感じ、恋愛対象とするが⁴⁾、女性は一人の男性に対して所有されること（またそれによって自身が男性を所有すること）を要求することを指摘し、「女性が経済的に自由なシステムにおいては、女性は間違いなく現在の男性のように多くの異性と恋愛をする（promiscuous in their loves）であろうが、私たちはいまだに、女性は自分を支えてくれる男性を見つけなければならないという伝統のもとに生きている」（Neill 1932, pp.73-74）と述べている。すなわち、男女の経済的不平等が女性に心理的影響を与え、恋愛的自由の制限という抑圧を与えていることを指摘しているのである。そしてこのような経済的不平等から女性を解放することで、男性に対する被所有欲がなくなり、男性と同じように恋愛的自由を得ることができることを論じている。

またこのような経済的不平等がもたらすものについて、「最も教養の高い家庭でさえ、少女たちは女性であることを社会に強いられることによって抱く普遍的な劣等感に悩まされている。家父長制の世界（patriarchal world）においては、女性は男性の所有物であり、ほとんどの既婚女性が夫に経済的に依存しているという事実は、すべての女性に劣等感を抱かせるに違いない」（Neill 1937, p.22）と述べる。家父長制社会において、女性は結婚後に経済的に夫に依存せざるを得ず、男性に「所有される」ことを強いられていること、そしてそのような社会構造の中で、「すべての」女性は男性に対して劣等感を抱くこととなることを指摘しているのである。また、「サマーヒル出身の少女たちは、そのほとんどが結婚後も続けられる仕事を持っている。それゆえに、彼女らの抱える劣等感は一時的なものではなく、普遍的なものであるのだ」（Neill 1937, pp.22-23）と述べ、仮に女性が仕事を持つことによったとしても、家父長制社会における劣位としての女性の位置付け、およびそれに基づく「女性らしさ」の強制が全ての女性を悩ませていることを指摘し、これを批判している。

さらに彼は、同一の職業においても賃金に男女格差があることを指摘している。そこでは教師職に着目し、女性教師と男性教師で給料が異なっていること、男性と同等の給料を女性にも支払うべきであることを主張している。この給与格差が生じている理由として、「神が男性であるのは男性が神をつくったのと同じで、私たちの法律が男性によってつくられたものだからだ。女性は劣った存在として扱われ、人生の重要でない部分においてのみ優れた存在として扱われる」（Neill 1939, p.102）と、その不平等が家父長制社会における男性中心的な制度設計によるものであることを指摘している。男性の方がより仕事ができ、それによって男性の方がより多くの給料をもらっている職種については一定の理解を示しつつも、「しかしこのような議論は教育（teaching）には当てはまらない。女性教師は男性教師と同じように懸命に働き、同じように優秀であ

る」(Neill 1939, p.103)と述べ、優秀な女性教師の存在を認めつつ、女性であるという理由で経済的に不遇な扱いを受けていることに批判の目を向けているのである。実際、サマーヒルでは男女間の平等主義が貫かれており、「同等の責任に、同等の給与」という方針に則り、教師はその性別、年齢にかかわらずみな均一の給与であり、仕事の内容についても、体力的な理由による多少の区別はあったが男女の差別は原則的になかったという(永田 1996, p.42)。

(2) 女性の職業選択の制限

男女の経済的不平等とは別に、女性の職業選択が制限されていることもニールは指摘している。「今の社会における私たちはまだ、女性よりも男性に多くのものを与える段階にいる。女性の職業のマーケットは決して広くない」(Neill 1937, p.29)「女性が第二級の市民であるような男性中心の世界では、女性の治安判事の数はいわゆる少ない。企業の重役や医師、弁護士数は圧倒的に男性が多い。女性が対等な地位を得ているのは、教育(teaching)と看護の領域だけである」(Neill 1972, p.329)と述べるように、家父長制社会(patriarchal society)において女性は劣位に置かれており、女性に開かれた職業が少ないこと、とりわけ社会的地位の高い職については極めて男性優位であることを批判している。また、このような女性の職業選択における自由の制限に見られるような男性支配社会の中で、「女性は我が身を飾り立てることによって自身の重要性を強調する」ようになることを指摘している(Neill 1972, p.329)。

彼の最晩年の著作“*Neill! Neill! Orange Peel!*”が出版された翌年の1973年にニールは死去することとなるが、その頃である1970年代の英国においては、1970年に賃金平等法(The Equal Pay Act)が、また1975年には性差別禁止法(The Sex Discrimination Act)が女性解放運動の中で成立し、ニールがこれまで長い間指摘していた男女の不平等がようやく改善の兆しを見せることとなる。このような流れについては、ニールも「現代の生活で最も元気付けられる傾向の一つは、この劣等者としての役割に対して多くの女性が反抗していることである」(Neill 1972, p.329)と述べていることから、彼が女性解放の潮流があることを認識しており、それを賞賛していたことが伺える。このことから、男女平等の原則に基づくこれらの法改正は、ニールの望む社会的変化と重なるものであったと捉えることができるだろう。

以上から、ニールの女性解放思想の要点として、①性別による経済的不平等、②女性の職業選択の制限、といった2点を明らかにした。また、女性に不利益を被るこのような社会状況は、家父長制社会における男性中心、男性支配の構造にあることを指摘していたことが明らかとなった。ここから、彼の女性解放思想の根底には、既存の社会制度に対する批判があったことが理解できる。これは言い換えれば、社会システム、社会制度の改革によって、女性の解放が図られるべきである、という社会改革の視点が彼にはあったことが伺える。

(3) フェミニズム思想上におけるニール女性解放思想の位置

ニール女性解放思想のこのような特徴を捉えると、第二波フェミニズムの思想的特徴との類似点を見出すことができる。固定的なジェンダー観をつくり出す社会的抑圧や経済的格差の是正、性に関する自己決定権などが主張されたことに第二波フェミニズムの特徴があることに加え、第二波フェミニズム草創期の理論家たちが、歴史を通じて女性を抑圧してきた社会システムを家父

長制（父権制）と定義し、前近代の大家族における男性家長の支配というイメージから、脱歴史化され、社会制度・政治制度・経済制度を通じて女性を抑圧する権威システムとしてこれを再定義したこと（秋山 2003, p.196）を踏まえれば、ニールの思想は第二波フェミニズムの特徴と重なっていることが伺える。むしろ第二波フェミニズム草創期の理論家として取り上げられているジュリエット・ミッチェル（Juliet Mitchell, 1940-）やシュラミス・ファイアストーン（Shulamith Firestone, 1945-2012）、ケイト・ミレット（Kate Millet, 1934-2017）が20世紀後半に台頭したことを鑑みれば、彼が第二波に先駆けてこれを提唱していたとも捉えることができる。また後述するように、ニール教育思想の理論的基盤はフロイトの精神分析学にあるが、先に紹介したミッチェルより先にフロイトの理論と女性解放思想を結びつけていたという点で、彼を評価することのできる可能性も否定できないだろう。ミッチェルはフェミニストのフロイト批判のなかに誤解や他の論者との混同があることを指摘し、フロイトは生物学的決定論に立ったのではなく、家父長制社会の中で女の心理がいかにか形成されるかを追求したのだとして、無意識、エディプス・コンプレックスといったフロイトの発見を、家父長制＝核家族における父の支配を分析する武器としてフェミニストも利用すべきだと主張し、1974年に『精神分析とフェミニズム』（Psychoanalysis and Feminism）を出版している。フロイトを理論的基盤とし、教育による子どもの解放を唱えたニールであったが、これに女子・女性の解放が結びついていると仮定すれば、直接的にフロイト理論とフェミニズムを結びつけていたとは言い難いにせよ、そのような人物として彼を評価することのできる可能性を見出すことができることも考えられる。

5. ニールの社会改革思想とそこにおける教育改革の位置

前章では、ニールの女性解放思想の根底に家父長制社会に対する批判があることを明らかにしたが、彼の社会批判は家父長制に対してのみ焦点が当てられているものではないことに注意する必要がある。そこで本章では、これまで取り上げた家父長制批判の文脈とは一度切り離し、彼の社会批判、および社会改革思想について取り上げる。その際、彼の教育思想およびその体現としてのサマーヒルにおける急進的な実践が、社会改革の手段として位置付けられていることが既に明らかとなっている。ここではそのような位置付けと教育における「解放」について、フロイト精神分析理論を基盤としたニールの理論を紹介しながら、社会改革思想と教育思想がどのように結びついているのかを明らかにする。

(1) 「解放」の理論の2つの性格

彼の教育思想における柱となる理念は、彼自身が「教育とは解放（release）である」（Neill 1921, p.157）と述べているように、抑圧・権威の排除と「自治」による「解放」であった。その方法は「解放の理論（release theory）」（Neill 1920, p.244）として展開されており、この理論こそが彼の構想する「新教育」の中心テーマであり、その理解を欠いてはニール「新教育」の全体像は見えてこないほど（山崎 1998, p.125）、「解放」という概念はニール思想を理解する上での重要性を帯びている。

では、ニールは子どもを何から「解放」することを目指していたのか。山崎によると、この

「解放」の理論は、「抑圧構造を個人の内的なものとして捉える場合には心理的な性格を、社会を意識したものとして捉える場合には社会的な性格を」（山崎 1998, p.121）表しており、前者を「抑圧・権威からの『解放』」、後者を「社会システム・階級からの『解放』」と分けて論じている。「『解放』の心理的な意味と社会的なそれは不可分なものとなっている」（山崎 1998, pp.121-122）ものの、このことから彼が社会批判の視点を有していることが伺える。

(2) ニールの批判対象としての「社会システム・階級」と社会改革思想

では、ニールが批判する「社会システム・階級」とはどのようなものを指すのだろうか。これについてまず山崎は、「そもそもギルド社会主義者で労働党員であったニールには、帝国主義や資本主義に対する激しい批判があった」（山崎 1998, p.123）という。「ギルド社会主義」とは、「ギルドというネーミングが示すように、中世の職能的な連合・ギルドを近代的な形で復活させようとしたものであり、また、フェビアン主義の漸進主義、議会中心主義、画一的集産主義への批判に基づき、労働組合のギルド的再編成を通じて直接民主制のギルド社会である多元的国家を構想した思想」（山崎 1998, p.79）のことを指すものであるが、無論それは資本主義を批判的に捉える立場である。実際に、ニールは「資本主義を打倒しなければならない。我々は、全ての事業を我々自身で行うことを要求する。我々は賃貸料や配当金や利子や、伝統的な賃金制そのものの廃止を要求する。今日では、我々は、自分たちの労働力を最も高い値段で買ってくれる入札者に売り渡している。そうすることによって、我々は肉体だけでなく魂までも売り渡しているのだ」（Neill 1917, p.173）と資本主義の賃金制度を批判の対象に挙げている。そして彼は、「資本主義が社会的・経済的な矛盾や差別を拡大するだけでなく、人間そのものへの抑圧を生み出す根源となっている、と捉えた」（山崎 1998, p.79）のである。実際、これを彼の女性解放思想と重ねてみると、性別に基づく経済的不平等といった社会的・経済的な矛盾や差別を指摘し、それが女性の抑圧を生み出していることを指摘していることから、経済的不平等という点において彼の女性解放思想には資本主義批判も内包していることが伺える。

また、このような「ギルド社会主義者」としての目をもったニールの批判は、「中央集権的な国家、被支配者を抑圧する教会、つまり権威を体現する『父権 (the power of Father)』とそれを支える大衆に向けられていたと解することができる」（山崎 1998, p.83）ものであったという。すなわち、「彼は社会の構造やシステムに潜む『父権』の打破を企て、その最たるものとしての国家、具体的には、国家政治が作り出す制度や政策、国家経済を支える資本主義の賃金制度、資本家を擁護する司法、国家の統治権を成立させている議会制民主主義に対して批判を向けていった」（山崎 1998, p.83）のである。このようなニールの批判は大衆に対しても向けられ、「争いに身を投じ、制度やカリキュラムに拘束され、また逆にそれを利用して権威を揮っている多くの人間」（山崎 1998, p.85）をも批判の対象とした。それは「選挙制度の改革や議会制民主主義の発展が、労働党の代表を議会に送り出すことを可能にさせたにもかかわらず、彼ら代表者は被支配者の自由や平等を保障するどころか、逆に、抑圧構造の再生産に加担している、と彼の目には映ったから」（山崎 1998, p.85）であり、大衆の意識をも変えなければ「父権」を打破することはできないと彼は考えた。さらに、「父権」が潜んでいる既存社会を形作っているものが道徳や宗教であることを指摘し、「社会階級の再生産の仕組みを既存の宗教や道徳の欺瞞的かつ本質的な機能

と関連づけて捉え」(山崎 1998, p.124)、それが社会体制の存続のために役立っているものとして批判したのである。

(3) 社会改革の手段としての教育改革

では、ニールはこの「父権」が潜んでいる既存社会をどのように改革することを構想したのであろうか。その手段として、彼は「教育」を挙げている。「世界が自由になるためには、教会や学校は父権の打破を目指さなければならないと私は考える」(Neill 1920, p.137)と述べるように、教会は勿論のこと、学校も父権を打破しなければならない対象として彼は捉えていた。加えて彼は「真の教育は現在の社会体制を払拭しようとする態度を育てる教育である」(Neill 1939, p.21)と述べ、大衆となる子どもを「解放」の理論に基づいて教育することによって、ボトムアップ的な社会改革が図られることを目指したのである。すなわち、ニール教育思想の根本原理である「解放」の理論は、「旧い社会から新しい社会への変革を射程に入れたものとして展開されていた」(山崎 1998, p.127)のであり、「教育改革」による社会改革を図ろうとしたのである。そして、その「教育改革」のテーマとして「抑圧や権威の排除、『自治』による社会性の発達、社会批判能力の育成、教師の連帯」(山崎 1998, p.128)があり、またその具体的方法として、サマーヒルの教育実践における顕著な特徴でもあるように、「宗教教育の廃止」「授業への出席の自由」「恐怖や憎悪からの解放」「自治による個人的無意識の意識化と創造活動による非個人的無意識の意識化」「自分自身の良心の形成」「自分自身である自由」(山崎 1998, p.129)を強調した教育を展開し、特に道徳律や宗教教義の注入を廃することによって、社会化された子どもの内に潜む「父権」の打破を企てた。そしてそのような教育による「権威に盲従しないで自分自身のものの見方や考え方を築いていくたくましい自由人」(堀 1999, p.22)を育成していくことで、既存社会に潜む権威や抑圧に対して疑義を打ち出してゆく、ボトムアップ型の社会改革を図ったのである。

(4) ニール教育思想における「無意識の意識化」について

ここで、教育改革の具体的方法として先に取り上げた中に挙げられた「個人的無意識」「非個人的無意識」といった、ニールの教育理論を説明する重要語句について着目したい。教育とは「解放」である、とニールが論じたことは先に述べた通りであるが、彼が「教育とは無意識の意識化 (making of the Unconscious conscious) である」(Neill 1923, p.43)とも述べているように、彼の「解放」の理論において「無意識の意識化」の理論は重要な位置を占めている。彼によると、ここにおける「無意識」とは、「我々が祖先から受けついで非個人的無意識もしくは集合的無意識 (Impersonal or Collective Unconscious) と、環境から獲得する個人的無意識 (Personal Unconscious)」(Neill 1923, pp.43-44)の2つが存在するという。「非個人的無意識」とは「自己保存 (自我本能) と種族存続 (性本能) を促す、根源的な生命力」(Neill 1923, p.44)として「人間が生まれながらに有する本能であり、分析学でエスと称されるところのもの」(霜田 1959, p.56)である。また、「個人的無意識」とは、「子供が本来有するものではなく人から与えられたもの」(霜田 1959, p.58)であり、「分析学上、超自我とか上位自我 (super-ego) とか呼ばれるもので、道徳的には良心と称されるもの」(霜田 1959, p.58)である。親や教師によって与えられる禁止や命令、教訓などが個人的無意識、すなわち良心として子どもに無意識的に内面化し、それが子どもに生

来備わっている非個人的無意識を抑圧し、内的葛藤を生じさせることによって、いわゆる「問題の子ども」⁵⁾を形成することを彼は論じたのである。彼が、「問題の子どもというものは決していない。あるのは問題の親だけである」(Neill 1932, p.9)と主張するのも、上記の理論に基づいて、もともと「問題の子ども」というのはおらず、子どもを問題にするのはその多くが親であることから、そこに孕む問題を明らかにするためには、子どもに焦点を向けるよりも親に焦点を向ける方が適切であることを示したかったのである、と解することができる。

では、この2つの無意識をどのように意識化すべきであるか。この問いについてニールは「自由(freedom)によって個人的無意識を意識化させ、創造(creation)によって非個人的無意識を意識化させるべきである。自由というのは自治(self-government)のことであり、大人の権威や道徳教育によらずに、子どもたちが自分たちの良心を形成する自由(liberty)を意味する」(Neill 1923, p.49)と述べる。すなわち、教育において「自治」による個人的無意識の意識化を助けることで、自分たちの良心を自由にすることができ、自由な表現による「創造」によって非個人的無意識の意識化を助けることで、感情的な部分を自由にすることができる、ということを実証したのである。

なお、この「無意識の意識化」の理論は、ホーマー・レーン(Homer Lane, 1875-1925)によって教授されたフロイトの自我論から着想を得ている。先に述べた通り、教育による「解放」の理論がフロイトの自我論から着想を得ていることを踏まえ、仮に女性解放の手段としてサマーヒルに女子教育的側面があることが見出されるとすれば、フロイト理論とフェミニズムを結びつけた人物として彼を評価することができる可能性を見出すことができると考える。そこで次章では、そのような女子教育的側面の有無について取り上げることとする。

6. サマーヒルにおける女子教育的側面の考察

前章において、ニールが「父権」の潜む既存社会における権威の存在と抑圧構造を批判し、「解放」の理論に基づく教育改革によってボトムアップ的な社会改革を図っていたことを明らかにした。本章では、彼の女性解放思想の中で批判の対象として取り上げられていた家父長制という社会制度批判が、「父権」批判に基づく社会改革思想と交差することを指摘し、教育改革-社会改革-女性解放といった結びつきから、サマーヒルの女子教育的側面を明らかにする。

(1) ニールの社会改革思想と女性解放思想の交差

ニールの社会改革思想から伺えるように、彼の批判対象はジェンダーに特化した「父権主義」ではなく、より広義の制度的な権威構造であったと考えられる。そのような意味で、「父権」批判に見られる彼の社会思想を直ちに家父長制における「父権主義」批判として女性解放思想と結びつけることには一定の慎重さが求められるものである。しかしながら、その批判がもたらした権威・抑圧構造全体への揺さぶりが、結果的に性別に基づく抑圧の解体にもつながる可能性を見出すことができる。そのような意味で、ニールの思想の根底にある「解放」の理念は、包括的な人間の自由を志向するものであり、結果として女性解放の文脈とも交差し得るものである。それは彼が家父長制を、女性を抑圧してきた社会システムとして捉え、そこからの女性の解放を唱え

たことから見て取れる。そこで次節では、社会システムに潜む権威・抑圧構造の指摘とそこからの解放という共通項から、それらの交差を見て取ることができるという点において、彼の社会改革思想の中に家父長制批判を位置付け、教育改革－社会改革－女性解放の文脈からサマーヒルにおける女子教育的側面について捉えていくこととする。

(2) サマーヒルにおける女子教育的側面

実際のところ、サマーヒルにおいて女子教育的側面を見出すことはできるのだろうか。言い換えると、教育を通して女子のエンパワメントを図る、といった側面がサマーヒルにはあったのであろうか、という問いに移りたい。ある者が女性解放思想を有し、その解放のための手段として教育を用いようとする際、当事者としての女性のエンパワメントを図るといった意味合いで「女子教育」という用語をもって説明されることが多い。しかしながら、サマーヒルは女子のみではなく男子も受け入れていた寄宿型の男女共学校であることに加え、「子どもの善性や自発性に基づき、知識、宗教教義、道徳律などの注入を否定し、子どもの関心や要求を重視すること」(山崎 1995, p.230) が根本原理であったことから、サマーヒルの教育をエンパワメントといった側面から説明する言説はあまり見受けられない。

とはいえ、女性のエンパワメントともとれるニールの主張は見てとることができる。それは、女性解放思想に繋がる彼の言説の中で、「既存社会における女性」と「サマーヒルで育った女性」を対比させている構図があることにある。すなわち、「既存社会における女性」が「退屈な仕事」しかできなかつたり「結婚後に経済的に夫に依存せざるを得ない」状況となつたりすることに対し、「サマーヒルで育った女性」は「舞台や美術や医学の方面をめざす」ことや「結婚した後も仕事を続ける」と述べていることから (Neill 1937, p.29)、サマーヒルにおける教育改革が既存の社会体制・社会規範にとらわれずに、女性の社会的・経済的自立や自由な職業選択、創造性の発揮に寄与するということが明確に述べていることが確認できる。また、先の「既存社会における女性」と「サマーヒルで育った女性」の対比を「解放」の理論における「無意識の意識化」の理論から分析してみると、「サマーヒル出身の少女たちは、そのほとんどが結婚後も続けられる仕事を持っている」ということについては、自分たちの良心を自由にすることによって、従来であれば社会から課せられていた男性の所有物としての女性という役割というものから自由になり、ジェンダー規範に関係なく自立して職業選択ができるということを示唆していると見ることができる。また、サマーヒル出身の女性が「舞台や芸術、医学の道に進む可能性は高い」ということについては、特に舞台や芸術に関しては、とりわけニールが教育活動の中で重視していた「芸術」の領域であり、サマーヒルにおける教育活動によって、非個人的無意識を意識化し、感情的な部分を解放することによってさらに自由な表現による「創造」へと向かうことができるようになり、それを生かして芸術系の職業に向かうことが多い、ということを示唆していると見ることができる。以上の点を踏まえると、サマーヒルにおいて女子に対するエンパワメントを図っているという見方をすることができることから、サマーヒルに女子教育的側面を見出すことができる。以上のことから、教育によって個人や社会から受けていた抑圧から子どもを解放し、権威に盲従しないで自分自身のものの見方や考え方を築いていくたくましい自由人を育成すること、そしてそれによって既存社会に潜む権威や抑圧を打破することによって既存社会が改革されること、さ

らにそのような社会改革によって女性を抑圧していた社会制度・システムも改革され、女性の解放へと繋がるというねらいが含まれていたことが明らかとなり、またその改革の主体として、女子のエンパワメントもサマーヒルの教育において図られていたことが明らかとなった。

7. おわりに

本稿では次のことが明らかとなった。ニールは既存社会において女性が抑圧されていることを指摘し、社会改革によって女性をそのような抑圧から解放するべきであることを主張していたことから、彼の女性解放思想は社会改革思想に内包して考えることができるものであった。そしてその社会改革の手段として教育改革が示され、女性を社会体制による抑圧から解放するために、教育によってボトムアップ的に社会改革がなされることを理想とし、サマーヒルはその教育改革の実践の場であった。教育による社会改革の担い手の育成という意味においては、男女に特に差異をつけることはなかったが、2つの無意識の意識化によって、ジェンダー規範に囚われない選択や創造性の醸成による豊かなキャリア形成など、女性のエンパワメントを図る意図が見て取れた点において、サマーヒルが女子教育的側面を有していたことが明らかとなった。

本稿でニールの女性解放思想とサマーヒルの女子教育的側面を明らかにしたことによって、新教育運動のフェミニズム的側面という新たな側面も示唆されるものであると考える。新教育運動が児童解放運動の高揚を促す契機となった(上坂 2013, p.119) ことを踏まえれば、子どもが受ける抑圧の存在や、そこからの解放を促すという視座の提供が新教育運動の特徴の一つであると言える。このことと、女性が劣位に置かれていた近代における教育による女子・女性の解放、という側面から、新教育運動の理念とフェミニズムは親和性を有していることが考えられる。同じく新教育運動の代表的人物としてエレン・ケイやマリア・モンテッソーリといった人物が挙げられるが、これらの人物もフェミニズム運動の中に位置付けられていることから、総体としての新教育運動にフェミニズムという新たな視座を提供できることの可能性を含んでいる。この可能性の追究という点からも、新教育運動家の思想研究に今後も着手していきたい。

また、本稿では彼のジェンダー観、すなわち女子・女性について、あるいは男子・男性についてどのように捉えていたのか、またそれが教育思想および実践にどのように繋がられていたのか、という点について明らかにすることができなかった。堀内は「日本にもこれまでニールの学校形態はしばしば紹介されているが、なぜか彼の『女性観』が紹介されることはない」(堀内 2008, pp.133-134) と前置きした上で、ニールの「問題の女教師」に関する主張を取り上げて批判しているが、それに関する内容はもちろんのこと、彼の人間形成論に対してジェンダーの視点から明らかにすること、すなわち、人間形成の過程において、女子と男子に差異があることを認めた上で教育論を構成していったのか、またその差異とはどのようなものであったのか、といった点が重要であると考えられる。それに関連して、「女子教育は、女性には男性とは異なる自然的な特性や役割があるとする『特性論』ないし『異質論』を教育の前提に据えてきた」(広井 2022, p.2) ことが一般的であるとされているが、女子教育の枠組みの中でニールおよびサマーヒルを語る際、彼が「特性論」ないし「異質論」を有しており、それを教育の前提に据えてきたか、という点を明らかにすることによって、彼の教育思想をより浮き彫りにできると同時に、女性解放思想史およ

び女子教育史におけるニールの位置を明確にすることができるだろう。これらのことについては今後の課題として、本テーマに関する研究をさらに進めていきたい。

- 1 イギリス新教育運動とは、国民教育制度が成立して間もない19世紀末より、注入や暗記を強いる形式主義の古い教育を批判する形で生じ、世紀転換期を経て1930年代末まで多様に展開された教育改革運動の総称を指す（山崎 2022, p.3）。
- 2 例えば坂元（1984）は、息子のサマーヒルでの学校生活を記した書に『世界でいちばん自由な学校：サマーヒル・スクールとの6年間』と名付けている。
- 3 例えば日本においてはニール研究者であった堀真一郎が創設した「きのくに子どもの村学園」、ニールの生誕地であるスコットランドにおいてはジョン・エッケンヘッドが創設した「キルクハニティ・スクール」などが挙げられる。また、1960年代アメリカフリースクール運動の勃興の誘因となったのもニールの教育思想であったと言われている（岩田 2015, p.25）。
- 4 なお、ニールは性愛の情は性欲に由来するものであるとしており、男女の肉体的な接触の欲求は肉体的な生殖器官に基づいているという。この肉体的生殖器官に基づく性的な欲望は性欲と表現されるが、性愛はこれに優しさが加わったものであると述べている（Neill 1939, pp.69）。
- 5 なお、「問題の子ども」というのは霜田によると大人から見た「困った子ども」のことであり、「あの子は勉強がらいで困る、あの子は泣き虫で困る、あの子は乱暴で困る、と親たちのしばしば訴えるのは、それはことごとく問題の子どもである。問題の子どもとは、単に折紙つきの不良児ばかりをいうのではない。親や教師たちに、あの子は困った子どもだと心配される子どもは、ことごとく問題の子どもである」（霜田 1967, p.11）と説明している。

【引用・参考文献】

- 秋山洋子（2003）「第二波フェミニズムの始まり」奥田暁子・秋山洋子・支倉寿子編著『概説 フェミニズム思想史』ミネルヴァ書房。
- 岩田弘志（2015）「1960年代アメリカフリースクール運動に関する一考察：A. S. ニールの思想受容の意味」『アメリカ教育学会』第26号、pp.24-36。
- 上坂保仁（2013）「西洋の教育思想と学校の歴史④：新教育の展開」田中智志・橋本美保編著『教育の歴史・理念』一藝社。
- 坂元良江（1984）『世界でいちばん自由な学校：サマーヒル・スクールとの6年間』人文書院。
- 霜田静志（1959）『ニールの思想と教育』金子書房。
- 霜田静志（1967）「訳者の序」A. S. ニール『問題の子ども』（霜田静志訳）黎明書房。
- 滝内大三（1994）『イングランド女子教育史研究』法律文化社。
- 永田佳之（1996）『自由教育をとらえ直す：ニールの学園＝サマーヒルの実際から』世織書房。
- 広井多鶴子（2022）「女子教育と『特性論』の歴史」『教育学研究』第89巻、第4号、pp.2-13。
- 堀真一郎（1999）『ニールと自由な子どもたち サマーヒルの理論と実際』黎明書房。
- 堀内真由美（2008）『大英帝国の女教師：イギリス女子教育と植民地』白澤社。
- 山崎洋子（1995）「ニールの『自由学校』思想に関する一考察：社会批判的視点をてがかりに」『日本の教育史学』第38巻、pp.230-249。
- 山崎洋子（1998）『ニール「新教育」思想の研究：社会批判にもとづく「自由学校」の地平』大空社。
- 山崎洋子（2022）『イギリス新教育運動の生起と展開：教師の自律性と専門職化の歴史』知泉書館。

*

Neill, Alexander Sutherland (1917) *A Dominie Dismissed*, Herbert Jenkins.

Neill, Alexander Sutherland (1920) *A Dominie in Doubt*, Herbert Jenkins.

Neill, Alexander Sutherland (1921) “The Outlook Tower”, *The New Era*, 2 (6), pp.156-158.

Neill, Alexander Sutherland (1923) *A Dominie Abroad*, Herbert Jenkins.

Neill, Alexander Sutherland (1932) *The Problem Parent*, Herbert Jenkins.

Neill, Alexander Sutherland (1937) *That Dreadful School*, Herbert Jenkins.

Neill, Alexander Sutherland (1939) *The Problem Teacher*, Herbert Jenkins.

Neill, Alexander Sutherland (1972) *Neill! Neill! Orange Peel!*, Hart.

Prud’homme, Marc-Alexandre / Reis, Giuliano (2011) “Comparing A. S. Neill to Rousseau, Appropriate?”, *Journal of Unschooling and Alternative Learning*, 5 (10), pp.1-19.

Stonach, Ian / Piper, Heather (2008) “Can Liberal Education Make a Comeback? The Case of ‘Relational Touch’ at Summerhill School”, *American Educational Research Journal*, 45 (1), pp.6-37.

【Abstract】

A. S. Neill's Women's Liberation Thought and the Aspect of
Women's Education at Summerhill

Ko MOCHIDA

(University of Toyama)

The aim of this paper is to clarify the women's liberation thought of A. S. Neill and the women's educational aspects of the practice at the Summerhill School he founded. In other words, based on the results of this research, it can be said that the key concept of 'release' in his educational thought also includes the meaning of 'liberating women from a male-dominated society', and that Summerhill also had an aspect of empowering women for this aim.

The following points were clarified in this paper. Neill pointed out that women were suppressed in traditional society, and he argued that women should be freed from such suppression through the reform of that society. From this, it can be seen that his thought on woman's liberation was contained within his thought on social reformation. Furthermore, he believed that the only way to achieve social reformation was through educational reformation, and he positioned education as a means of liberating women from suppression by the social system. Summerhill was the place where this educational reformation was put into practice. In terms of educating people to become agents of social reformation, he made no distinction based on gender. However, his thought did include the intention of empowering women through 'making of the Unconscious conscious (i.e. release)'. As a result, it can be said that Summerhill had an aspect of women's education.

This paper aims to reconsider Neill's thought from a new perspective, and it is significant in that it has value in the study of educational thought, and also in that it shows the possibility of locating Neill in the history of women's liberation thought and the history of women's education.

However, this paper has not been able to clarify his views on gender, that is, how he viewed female or male, and how these views were connected to his educational thought and practice. I would like to continue related study on these issues as a future issue.